

## 雲南市立病院医学雑誌投稿規程

1. 本誌は、学術部門で、原著、総説、調査・報告、症例・事例報告、研究速報と非学術部門（QC活動報告、経営・運営報告・指針、意見、所感などの記録）を掲載する機関紙で、その名称を「雲南市立病院医学雑誌」とする。非学術部門への投稿は学術業績とは見なされない。英文名は「Medical Journal of Unnan City Hospital」とする。
2. 本誌は、印刷雑誌を基本とし年1回刊行するが、一部採用決定、著者校正後速やかに病院ホームページを通じて電子媒体として先行発表することもできる。その場合、先行発表後の修正は不可で、発表日時はホームページ掲載時とする。
3. 投稿者は、共著者も含め雲南市立病院の職員および関連する医療・福祉関係者などで編集委員会が認めるものとするが、編集委員会で承認された場合はその限りではない（研究に関わった、または、症例・事例の診療、看護に関わった院外関係者など）。筆頭著者としての一般からの投稿も編集委員会が認めれば受け付ける。責任著者（corresponding author）を指定することもできる。
4. 学術部門の投稿論文は未発表のもの、同時に他誌に投稿中でないものに限る。本人や第三者のホームページで公開、または公開予定のものは投稿できない。ただし、先行して日本語以外で発行されたものを、公衆衛生に利すると考えられたり、教育、啓発の意味で本誌に余剰出版、重複出版として再投稿する場合、編集委員会の判断で採用されることもある。この場合は、先行発表した雑誌の編集委員長の承諾を得た書類を添付するとともに、論文内に外国語で発表済であることを明記し、その論文を参考文献として引用しておく、論文種別は「資料」とする。また、日本語の雑誌に既に発表したものの抄録や図の一部を、同様の目的で本誌に再投稿する場合も、同様に先行発表した雑誌の編集委員長の承諾と出版社から著作権に関する承諾を得ておく必要があり、発表の中で発表済であることを明記し、その論文を参考文献として引用し、論文種別は「資料」とする。すでに原著形式（学会の発表抄録や形式の整っていない発表後抄録は除く）で発表されている場合には、その一部に多少の変更や追加があっても、基本的に同一内容、同一の結論であれば、二重投稿とみなす。症例・事例報告では、同一症例を使用する場合、考察の視点と結論が異なれば別論文とみなされることもあるが、その場合は、論文内に先行論文と同一症例であることを明記し、その論文を引用する。研究論文では、対象症例が全く異なれば検討内容や結論が同じでも別論文として扱うが、対象症例が重複する場合は目安として新たな症例数が1.5倍以上となったものは別論文とみなすが、二重投稿か否かの最終判断は編集委員会による。
5. 原稿は和文、英文いずれでもよい。
6. 学術部門の論文では、Helsinki宣言に準じていることやその研究、発表専用の個別同意書、または記述、または研究発表に関する院内包括同意書を口頭で取得していることの明記、など倫理的配慮に関する記載が必須で（必要としないと思われる場合もこれを明記する）、必要な場合は研究や発表に先立って倫理審査を院内倫理委員会で行う（別に院内倫理委員会の規程に従う）。症例・事例報告でのプライバシー保護に関しては日本外科学会など外科学系学会が提唱しているものに準じる。
7. 学術部門の原稿の採否は、編集委員会で指定する査読委員の査読を経て、編集委員会で決定する。非学術部門の採用は、編集委員長が病院長などと協議の上決定する。
8. 発表された論文の著作権は病院に所属し、以降、個人的使用以外では、著者本人の使用にあたっては病院の了解を得た上での使用となるが、これは、貴重な発表内容や図表の知的財産を筆者に変わって保護することが目的で一般の学術雑誌で行われており、原則的に、学術・教育目的、院内での使用は妨げられない。
9. 論文発表に先立って、著作権の病院への無償譲渡の同意書、学術部門では、二重投稿および倫理的配慮に関する誓約書と利益相反の有無に関する書類を提出する（いずれも別記）。
10. 原稿は、院内メールで総務課企画係宛に投稿する。ただし、スライド写真など院内メールに添付できない物がある場合には、電子記録媒体（CD、USBなど）で提出する。
11. 原稿の形式は次のとおりとする。ただし、非学術部門での投稿はこの限りでない。
  - (1) 原稿は、原則としてMicrosoft Wordで作成し、和文はA4版に横書き、英文はダブルスペースで記載する。
  - (2) 論文は、表題、著者名、所属を和文で明記し、key word 3語以内、running title（和文は25字以内、英文は5語以内）を記入する。

- (3) 要旨は、和文400字以内、英文200 words以内とする。英文の場合は同一内容の和文抄録を添付すること。また、和文の場合は英文抄録を添付することが望ましい。
- (4) 本文は、はじめに、対象と方法、結果、考察、結論、謝辞、文献の順に記述する。倫理的配慮に関しては方法の項で、利益相反に関しては結論の後に記載する。
- (5) 図、表、写真は本文とは別にし、図1、表1、写真1のように順番を付して原稿内に挿入すべき位置を明示する。また、簡潔な説明文を付記すること。
- (6) 病院ホームページなどオンラインで公開する原稿についてはカラーの物も受け付けるが、印刷物については白黒印刷を原則とし、カラー印刷代は実費を著者負担とする。
- (7) 数字は算用数字を用い、度量衡の単位および略語は原則としてSI単位を用いる。
- (8) 論文中にしばしば繰り返される用語は略語を用いてかまわないが、特に慣用されているものを除き、初出時に完全な用語を記載する（例：「enteral nutrition：以下、EN」など）、薬剤名は一般名を記し原則商品名を用いない、日本語論文での表記は原則日本語、適切な和訳のない用語はカタカナとし、固有名詞や英語表記がきわめて一般的な用語に限り原語表記とする、など学術論文の書式一般に従った記載とする。
- (9) 学名（細菌名など）はイタリック体で表記すること。イタリック体に変換できない場合は編集委員会に確認すること。
- (10) 文献の引用は論文に直接関係あるものにとどめる。著者名は3名まで列記し、それ以外は“他”または“et al”とする。雑誌名は、各雑誌により決められている略称を用い、外国雑誌はIndex Medicusによる。
- (11) 文献記載の順序、方法は以下の通りとする。
- ・雑誌の場合
 

雑誌：著者名. 表題. 雑誌名. 出版年；巻：最初頁-最終頁.

    - 1) 大多和威行, 佐藤啓造, 藤城雅也, ほか. 血漿中アラントイン／尿酸比からみた霊長類のプリン代謝に関する研究. 昭和医会誌. 2010; 70: 263-271.
    - 2) Sato K, Kumazawa T, Katsumata Y. On-line high-performance liquid chromatography-fastatom bombardment mass spectrometry in forensic analysis. J Chromatogr A. 1994; 674: 127-145
    - 3) Kito M, Sato K, Nittono S, et al. Long-term storage of blood samples as freezing hemolysates with Good's buffer for methemoglobin determination: its application to blood from livestock and from a patient with congenital methemoglobinemia. Med Biol. 2013; 157: in press.
  - ・単行本の場合
 

単行本：著者名／編者名. 書名. 版数. 出版地：出版社；出版年.

    - 4) Berne RM, Levy MN, eds. Physiology. 3rd ed. St. Louis: Mosby Year Book; 1993.

単行本の一部：著者名. 表題. 編者名. 書名. 版数. 出版地：出版社；出版年. 最初頁-最終頁.

    - 5) 佐藤啓造. 医師と法律. 澤口彰子編. 臨床のための法医学. 第6版. 東京：朝倉書店；2010. pp174-195.
  - ・WEBサイト、WEBページなどインターネット上の情報の場合
 

ただし引用文献として採用かの判断は編集委員会による

著者名. ページ名. サイト名. URL. 更新年月日. 閲覧年月日

    - 6) 多田恵一. 秋田市の救急救命士による気管挿管に関する4学会合同調査. 交流関連. 日本麻酔科学会. <http://www.anesth.or.jp/news/i030716.html>. 2003年7月16日. 2008年1月3日.
12. 原稿字数制限  
 原著、総説、調査・報告：16000字以内  
 症例・事例報告：8000字以内  
 研究速報：2000字以内、図表1枚
13. 原稿の校正は原則として著者が1回行う。
14. 掲載料は無料とする。別刷は30部まで無料贈呈するが、それ以上は実費を著者負担とする。
15. 原稿は11月末までに編集委員会事務局（総務課企画係）に提出する。

## 編 集 委 員 名

委員長	森 脇 義 弘		
編集委員	太 田 龍 一	勝 部 琢 治	小早川 裕 子
	永 瀬 正 樹	長谷川 英 美	平 岡 毅 郎
	藤 原 誠	森 山 直 美	渡 部 初 枝

### 平成28年度査読者一覧 (編集委員を除く, 50音順, 敬称略)

石 原 忍	板 持 さとみ	江 角 小百合	太 田 龍 一
大 谷 順	奥 田 淳 三	菊 地 亮	佐 野 啓 介
茂 富 良 太	芝 原 啓 子	白 石 淳 子	象 谷 ひとみ
田 中 美能留	檀 浦 智 幸	長 妻 節 美	西 村 広 江
秦 和 夫	前 島 里 子	松 井 讓	松 浦 秋 湖
笠 芳 紀	若 槻 純 子		

以上, 御協力有り難うございました。

雲南市立病院雑誌編集委員会

## 編 集 後 記

大谷病院長より、医学雑誌を発刊してほしいとの話があり、経営委員会で確認され、編集委員会を招集し、2月より発行を計画してきました。当院では10年ぶりの医学雑誌発行となります。当時の医学雑誌の発刊はどのようにしていたか、投稿規程はどうなっていたか、誰もわからず、手探りの状況ではじまりました。編集委員会内で相談しながら、投稿規程の策定、院内周知、査読のルール化など、ひとつひとつ新たに決まりを作っていました。

一番心配していたのは原稿が十分に集まるかどうかで、「最初から無理をし過ぎないで、ゆっくりいこうか」と思っていました。しかし、多くの職員のご協力により、最終的には10編を超えることができました。当院のような市中病院においては、日常診療を最優先にすすめていくことが求められます。これまで、当院の職員間で「研究」という分野はあまり活発的に活動をしてこなかったように思います。医療職として、探究心と仕事をひとつずつまとめることが医療レベルの向上に繋がると思い、この医学雑誌発刊がひとつのきっかけになればと思いながら編集作業にあたってきました。

今後の課題は、質と量を下げないように、院内の研究活動の協力体制を構築しつつ、少しずつ向上を心がけ、発行を続けていくことにあると思います。「継続は力なり」といいますが、本雑誌が定期的に刊行され続けることが最も重要なことだと思います。再開した今回はみんな力が入り発刊することができましたが、真価は次回以降に問われるのではないのでしょうか。来年の3月には新病院での診療開始という一大イベントもあり、全職員が多忙な毎日を送ると思いますが、今後も職員の皆さんの更なる努力とご協力をお願いいたします。

10年ぶりの発刊に向け各部署のご協力により、医学雑誌を無事に発刊することができました。ご協力いただきました方々に深く感謝申し上げます。本雑誌の発行が当院のAcademicな活動の一助となり、臨床・教育・研究を含めて総合力の向上につながるよう努力してまいります。

雲南市立病院医学雑誌  
編集委員会事務局 勝 部 琢 治

---

雲南市立病院医学雑誌

Medical Journal of Unnan City Hospital

2017年3月31日 印刷

2017年3月31日 発行

発行責任者 大谷 順

発 行 所 〒699-1221 鳥根県雲南市大東町飯田96番地1

雲南市立病院内

雲南市立病院医学雑誌編集委員会

印 刷 所 〒693-0046 出雲市下横町350

有限会社 ナガサコ印刷

---